



医学研究の 社会還元をめざして

エイズ診療部
教授
森本 幾夫

日本の臨床医学及び医学研究に飽き足らず渡米して16年、その間臨床免疫学の研究、その臨床応用にたずさわってまいりました。この度晴天の霹靂にて新設されたエイズ診療部に赴任することになりました。私がいたボストン、ダナファーマー癌研究所は、ハーバード大学の付属研究施設で医科研と色々な面で似かよっており、多くの基礎研究部とベンチプロダクトのベットのサイド応用を目指した内科、小児科を中心とした臨床部から成り立っております。ベッド数は60ほどしかありませんがそのベッドは新しい治療法開発のために用いており、所謂プロトコルホスピタルでその理念は現在の医科研病院の目指すものと同じといってもよいかもしれません。これまで私は米国、日本の臨床医学について臨床、研究の両面から比較できる立場にありました。基礎医学の分野では一部の領域で、日本でも国際レベルの独創性の高い研究が数多く出現しております。

しかし臨床医学に関しますと日本の古い医局の体質にも起因するのでしょうか、科学に則った臨床に乏しく、オリジナリティの高い新しい治療法、診断法の開発はほとんど見られず、極端に言いますと外国での有効性を確認して初めて導入するという風に、受け取られかねません。臨床医学の研究テーマについてみても、欧米の研究からヒントを得た、二番煎じや本邦初演と言う内容のものが多くのようにみられます。医科研病院では、現在プロジェクト診療、先端的医療を推し進め、日本のメッカたらしめ、さらに世界にそれらの知見、コンセプトを発信しうる機関にならんとしており、また米国での経験を生かしその目標のために頑張りたいと思っております。今後の方針として現在の治療、診断法の限界及び問題点をベッドサイドの中からの確につかみ出し、ベンチサイドにフィードバックさせ、その結果として、自らの研究及び基礎研究部で得られた知見、産物を速やかにベッドサイドに適用し、「病に苦しむひと」に希望をもたせる「医学研究の社会還元」を目指したいと考えております。今浦島となっております私に医科研の皆様のお助力のほどよろしくお願いいたします。

CLINICAL RESEARCH WARD

感染免疫内科診療科

医科研感染免疫内科といえばエイズ診療の日本の中核機関とすぐに思い浮かぶ方が多いかと思いますが、熱帯病とくにマラリアの臨床においても本邦におけるトップレベルを誇っております。新しい病気と伝研以来の伝統を踏まえた感染症の両面を押さえている我が診療科ではありますが、昨年来、教室が大きく生まれ変わり、まさに伸びつつある教室といえます（ハード面に関しては部屋に一步入っただけですぐにわかります。是非お早めにいらしてください。）。病棟業務に携わるメンバーは現在8名ですが、全員が同時にエイズもしくは熱帯病の臨床および基礎研究にも取り組んでいるため、やや人手不足ではあります。

エイズ診療は、HIV感染の治療と日和見感染症のコントロールという大きな2つの柱からなります。このどちらかが欠けても医療は成り立ちません。当科が、1986年来、本邦において先駆的にエイズ診療に取り組んできた事は、周知の事実であります。当科が築き上げてきたエイズ治療法および種々の日和見感染症の診断法・治療法などは、常に国内外から注目され充分社会のニーズにも応えてきました。新生感染免疫内科としては、これらの業績を踏まえうえて、新しい角度からみたエイズ診療をめざし、決意新たな



第一歩を踏み出したところであります。臨床研究は、患者を集め診療を行なうことからスタートします。この点、常時通院してくるHIV感染者数は、現在すでに当院の病院規模からすれば十二分すぎるほどで患者さんの期待が感じられます。しっかりと地固めされた診療に基礎をおく先端医療の開発が、我々に新たに課せられた使命であります。なかでもエイズの病態解明に関する研究とその知見を基にした新しい治療法の開発は、医科研病院の新しいプロジェクトである遺伝子治療などにも結びつくと思われ、スムーズな船出が出来たものと思っております。